

飯豊・宇津峠の道支える石積み

工法調べ「新名所に」

明治―昭和期に置賜と新潟県を結ぶ重要な路線だった旧国道113号。中でも難所として知られた飯豊町の宇津峠に道路を支える石積みが現存しており、町や地元住民が文化資源としての価値を高めようと分布調査に乗り出した。道路の工法を確かめるとともに、散策ルートの新名所として魅力を高めていく考えだ。

旧国道113号は1889年(明治27)年に開通した。江戸期の越後米沢街道と重複する部分が多く、中でも宇津峠は勾配が激しい。1964(昭和39)年の前回東京五輪に際し聖火ランナーが通過したエピソードも

残る。67(昭和42)年に新道に移行するまで交通の重要な役割を担い、経済活動を支えた。

町教育委員会が主体となり、道路のり面の崩落防止のために築かれた石積みの調査に4月、着手した。

手ノ子地区協議会宇津峠部会と萩生地区住民のほか、山形大も社会教育の一環として留学生を派遣し協力。6月をめどに調査を終え、本年度内に結果をまとめる。

石積みは大小3カ所現存し、最も規模の大きい物は長さ約30㍎、高さは埋没部分を含め最大5㍎以上。直径25㍎40㍎ほどの石を斜め



旧国道113号のうち宇津峠に現存する石積みの調査が始まった
＝飯豊町手ノ子

に交互に積み上げる「谷積み」と呼ばれる工法で、拳ほどの石や、しつこいかせ

メントのような隙間を埋め補強してある。今月10日の調査では石積みの上部を通る道に幅約70㍎、深さ40㍎50㍎ほどの溝を掘り、土層を分析。石積みの内側から解析も試みた。

「土盛りしたのか、斜面を削ったのか、道路の工法

を確認したい」と町教委の高橋拓主事(41)。宇津峠部会の高橋純部会長(73)は「石積みは宇津峠のお宝になり得る」とし、「宇津峠を歩こう会」の新たな名所にしたいと意気込む。

ペルー人留学生カリーナ・オルナさん(27)は「水分が多い土なので掘るのが大変」と、スコップを使った掘削に苦労しながらも「日本の考古学の現状を学びたい」と意欲十分。ナスカ地上絵研究に携わる山形大の坂井正人教授も留学生と共に現地を訪れ「ペルーと日本の発掘の共通性を学ぶ機会は貴重。いい経験になるはずだ」と話した。